

メッセージ「あなたの『おうち』はどこですか？」

牛田 匡 牧師

聖書 ヨハネによる福音書 8章1-11節

「あなたの『おうち』はどこですか？」と聞いて、何かを思い出された方はいらっしゃるでしょうか。保育園でも小さい子どもたちが大好きでよく歌っている童謡「犬のおまわりさん」の中の一節です。この歌は改めて紹介するまでもなく、皆さんご存知かと思いますが、国民的童謡とも言えるかもしれません。

迷子の迷子の子ネコちゃん、あなたのお家はどこですか

名前を聞いても分からない、お家を聞いても分からない

ニャンニャンニャンニャン、ニャンニャンニャンニャン、泣いてばかりいる子ネコちゃん

犬のおまわりさん、困ってしまって、ワンワンワン、ワンワンワン

というものです。2番では、カラスやスズメが出て来ますが、犬のおまわりさんがカラスやスズメに子ネコちゃんの名前やお家を聞いても分からずに、子ネコちゃんもイヌのおまわりさんもニャンニャン、ワンワン泣いているという歌詞です。

以前、保育園の誕生日会で先生方が劇をして下さった時には、この歌に3番が付けられて、子ネコちゃんを探しているお母さんネコが現れて、子ネコちゃんと再会出来て「めでたしめでたし」というお話になっていました。ですが、元来は2番までの歌です。迷子になって、困ってしまってニャンニャン、ワンワン泣いているだけというこの歌は、一体何を表現しているのでしょうか。この歌の作者・佐藤義美さん(1905-1968)は、大分県竹田市の出身だそうです。今ではそこに「佐藤義美記念館」があるそうです。その記念館の方によると、佐藤さんは生前、この歌について「人間そのものを表わした歌」と言われていたのだそうです。この歌は1960年(昭和35年)に発表されました。時代は戦後の高度経済成長の真っ只中。ベビーブームがあり、集団就職などがあり、全国各地から都市への人口の移動が興っていた時代です。

田舎であれば、自分の名前も住所も言えない迷子の子どもが泣いていても、周りの大人たちはその子がどこの誰の子どもかを知っています。もしも自分がその子を知らなくても、近くにいる誰かに聞けば、その子を知っている人を見つけることは容易に出来たでしょう。場合によっては、その子の名前や住所だけではなく、その子の親や兄弟、祖父母や親戚の名前や住所、仕事まで教えてくれるかもしれません。そのような昔ながらの土地に根差した人間関係は、濃密である一方、また制約が多く、息苦しいものでもありました。だからこそ、多くの方は、田舎のムラ社会を飛び出して、自由な都市にやって来ました。しかし、それは孤独と隣り合わせでもありました。この歌を作った時、佐藤さんはどこまで都市に住む人々の問題を察知していたのかは分かりません。しかし、それから60年を経て、今、問題はますます深刻になっているのではないのでしょうか。自分の名前も家も失い、仕事や役割、立場を失い、自分自身を見失って、右往左往し、弱り果て、ニャンニャンと泣き尽くしている子ネコちゃんがたくさんいます。さらに国家権力の象徴と考えられる「犬のおまわりさん」も、そばに来て何かをしてくれ

るように見えながら、実はただワンワン泣いているだけ……。誰も何もしてくれず、問題は何も解決しないまま子ネコちゃんは増えて行く……。

詩人は 60 年前に、鋭い感性によってこの歌を作り、子どもたちは詳しい意味は分からないけれど、何か心に響くものを感じて好んでこの歌を歌っている。新型コロナウイルス感染症という新しい病気が蔓延しているこのコロナ禍の中、迷子の子ネコちゃんはますます増えているのではないかと思います。

福岡の北九州市でホームレス支援を続けておられる奥田知志さんは、「ホームレス」と「ハウスレス」は違うと言われます。路上で野宿されていた方が、生活保護を受けてアパートで暮らせるようになっても、それだけではホームレス支援ではない。「私たちには単なる箱としてのハウスではなく、帰るべきホーム、自分の帰りを待っていてくれる家族がいる所、自分の居場所としてのホームが必要だ。そのようなつながりを作る活動が必要だ」と、以前から言われていました。奥田さんたち NPO 法人・抱樸^{ほうぼく}は、今回のコロナ禍の中で、多くの人々が「ステイホーム」している中でも、ホームを失っている人々と、過疎で空き家が増えて問題になっている地域とを結びつけて、住宅と雇用を生み出す取り組みを新しく立ち上げられました。迷子の子ネコちゃんを一人でニャンニャン泣かせておかない。「あなたのお家を一緒に作りましょう」というこのような取り組みは、全国から 1 万人を越える多くの方々の賛同を得て、3 ヶ月間のクラウドファンディングで目標額を上回る 1 億 1,500 万円が集められたそうです。それだけの人々の思いがある、つながりがある、ということは、この分断と孤独の時代にあって、大きな希望なのだと思います。

さて、今回の聖書の箇所は、聖書協会共同訳聖書には「姦淫^{かんいん}の女とイエス」という小見出しが付けられている箇所でした。聖書を見ると、7 章 53 節から 8 章 11 節までが [] に囲われていますが、これは古い写本には書かれていないお話だということです。イエス様と弟子たちがこの地上を歩まれたのは、今から約 2000 年前です。当時はもちろん印刷技術はありませんし、書物は全て手書きでパピルスや羊皮紙に書き写されました。そのために、いくつもの写本やその断片が現在までに見つかっていますが、現存する資料の中でも、古い時代のものには、このお話が載っていません。そのことから、このお話はもともと「ヨハネ福音書」には含まれておらず、ずっと後になってから、書き加えられたと考えられています。とはいえ、このお話自体は、古くから知られていた伝承と考えられています。ですので、後の時代になってから書き加えられたから、このお話は嘘であり、聖書として意味がないのか、と言うと、もちろんそうではありません。他人の罪を厳しく糾弾する人々に対して「あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」(8:7) と言い、「みな多かれ少なかれ罪を犯している。完璧な人間などいないのだから、誰にも他人の罪を裁くことは出来ないのだ」というような趣旨で、罪の女性を赦したというこのお話は、なるほど確かにイエス様らしい言動であり、福音書に加えられて当然のお話だとして理解され、受け入れられ、教会でも何度も語られて来ました。

そして、このお話が教会で語られる時、その趣旨は、「罪の赦し」と 11 節のイエス様の最後の言葉「行きなさい。これからは、もう罪を犯してはいけない」に、重点が置かれて語られて来たのではないかと思います。今日の「招きの詞」は、ヘブライ語聖書に記されている主なる神ヤハウエとは、どのような神様であるかということ、ヤハウエ自身が自分で自分を、自己紹介（自己規定）している言葉でした。「主、主、憐れみ深く、恵みに満ちた神。怒るに遅く、慈しみとまことに富み、幾千代にわたって慈しみを守り、過ちと背きと罪とを赦す方」（出エジプト記 34：6-7）……。それ位に憐れみ深い神様は、女性の罪をも断罪しません。寛大に赦します。だから、もう二度と罪を繰り返さないように、くれぐれも気を付けなさいね。……そのように「寛大な神様と罪深い人間個人」という構図に基づいて、このお話は語られて来たのではないかと思います。

しかし、本当にこのお話は、そのようなことを言っているのでしょうか。まず不自然に思うのは、3 節「律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦淫の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせた」ですが、結婚関係以外での「姦淫」「不倫」の現場で捕まえました、というのに、この女性の相手の男性は連れて来られていないということです。ヘブライ語聖書に記されている「律法」によると、男性も女性も両方が死罪として処刑されることになっていました（レビ記 20：10、申命記 22：22-24）。律法学者たちやファリサイ派の人たちが、その律法を知らなかったはずはありません。ただ不倫の現場から、男性は女性を置いて、一人で逃げて行ったから、女性一人を捕まえて来たのかもしれませんが、またイエス様の母マリアのように父親不明の子どもを身ごもって、お腹が大きくなって来たのを見咎めて「不倫の結果だ。姦淫だ」と言ったのかもしれませんが。そもそも律法学者たちやファリサイ派の人々が、この女性を連れてイエス様の所に来たのも、イエス様を訴える口実を得るために、イエス様を試すためでした。彼らは、イエス様が「律法には従わなくてもいい。赦してやりなさい」と言えば、モーセが神様から賜った律法を無視した^{かど}廉でイエス様を告発し、「律法通りに石を投げなさい」と言えば、弱く小さくされた人々の友、罪人の仲間と言っておきながら、やはり女性を見殺しにするのかと言いつつ心づもりでした。しかし、イエス様はその問いには直接答えられませんでした。

6 節には「イエスはかがみ込み、指で地面に何か書いておられた」とあります。まるで、律法学者たちを無視しているかのようです。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、「あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」

(7) と言われました。その結果、女性を引き連れて来た人々は、一人また一人と去っていき、誰もいなくなりました。それからイエス様は、身を起こして女性に問いかけられました。「あの人たちはどこにいるのか。誰もあなたを罪に定めなかったのか」(8)……。神殿の境内、広場にはイエス様とその女性の他には、もう誰も残っていませんでした。誰もいないことは一目瞭然であったのに^{かか}も拘わらず、何故ここでイエス様はあえて女性に「あの人たちはどこにいるのか」と問いかけられたのでしょうか。それは、イエス様の方からこの女性と出会い、対話することによって、つながろうとしたからではないかと思います。不倫の^{かど}廉で複数の男たちによって大勢の人々の間に連れて来られ、

いつ石を投げつけられて殺されるかもしれないという恐怖と孤独に^{おび}怯えていた女性です。ここで「姦淫」「不倫」と呼ばれている事柄の内容は分かりませんが、この女性がいわゆる性暴力の被害者であったとしても、当時の律法では「姦淫」と見なされ断罪されました。そのような女性に対して、イエス様が一方的に何かを語り掛けられたのではなく、「あの人たちはどこに行ったんですか」と質問することで、女性からイエス様に対して応答し易くしたのではないかと考えられます。それによってイエス様との関係性は、一方的に与えられるだけのものではなく、お互いのまなざしを向け合い、女性の方からも応答するという双方向のコミュニケーション（つながり）となりました。男たちのしつこい質問に対して、イエス様がかがみこみ、地面に何かを書いておられた（6, 8）というのも、一見不可解な行動にも思いますが、男たちから乱暴をされて無理やりに引っ張って来られたこの女性への気遣い故のことであったのかもしれない。

そして「主よ、誰もいません」と答えたこの女性に対してイエス様が言った言葉は、「私もあなたを罪に定めない。行きなさい」（11）でした。最後の「これからは、もう罪を犯してはいけない」という一文は、このお話が記されている写本の中でも書かれていない写本もあり、後代の加筆と考えられます。そのために、このお話の元来の終わり方は、この「行きなさい」という言葉でした。この「行きなさい」という言葉は、「うちに帰りなさい」という意味でも言われる場合が多い言葉です。しかし、この女性には帰ることの出来る「家」、安心して休める「ホーム」はあったでしょうか。確かに福音書を読んでいると、イエス様に手当てをされた人々が「あなたのお家に帰りなさい」と言われている箇所が多くあります。しかし、それらは「お家」があった人々に対する言葉だったのでしょうか。ここでの「行きなさい」というイエス様の言葉は、写本によっては、「（人生の旅路を）行く、生きる」という意味合いの言葉が使われています。ですから、イエス様はこの恐怖に怯える女性に対して、「元いた場所に帰りなさい」と言ったのではなく、「あなたの人生を生きなさい」「あなた自身の人生を、生きられる所に行きなさい」と言ったのだと思います。

「誰もあなたを断罪することなど出来ません。私もあなたを裁く気などありません。さあ、ここからあなたの人生を生きて行って下さい。今、あなたと私が『つながり合い』を感じたように、あなたの居場所、安心出来る『おうち』は、これからきっと見つかるでしょう。『つながり合い』を信じて、生きて行って下さい」……。このように、イエス様の言葉と振る舞いは、この女性に新しい命を生き、新しくおうちを作って行く道へと力を与えたのだと思います。

「あなたのおうちはどこですか？」 今、私たちの周りには、迷子の子ネコちゃんはいないでしょうか。また断罪される恐怖に怯えている人はいないでしょうか。そして私たち自身はどうでしょうか……。そのような人々に対して、共にいて下さるイエス様は言われます。「大丈夫、怖がらないで。あなたの人生を生きなさい。あなたのおうちは見つかります。作っていくことができます」。私たちは今日も、共にいて下さる神様からの励ましと力を頂きながら、ここから歩みを進めて行きます。